

験3区、オーロファック 10 を 0.05% 添加の試験4区の増体率指数は 103 で夫々試験1区よりは増体に良好な傾向にあるも統計処理の結果有意差は認められない。

(2) 飼料要求率

積算飼料要求率について、各区共大差を認めない。

(3) 鶏の健康状態

育雛率に若干の差はあるが薬死雛の原因は卵黄未消化、爭死死が大部分であつて飼料による差とは考えられない、活力、糞便飼料の嗜好等にも各区の間に差異を認めない。

以上の成績よりテレフタル酸(ナトリウム塩として99.5%以上のもの)を基礎飼料に0.05% 0.1% 添加することにより無添加区よりは発育、飼料要求率に若干良好な傾向にあるがその差は統計的に有意差は認められない、オーロファック 10 (クロールテトラサイクリン/kg 中に22%含有) 0.05% 区とも同程度であり両者の間に大差は認められない。

19. ダイナファックの雛に対する給与試験

名 倉 清 一 井 崎 金 二
殿 内 正 芳 清 水 明 良

1. 目 的

第4級アンモニウム塩の雛に対する成長促進効果は海外文献により散見されるどころであるが、わが国においては、この利用が実用的に有利であるかどうかについては実用的試験例がないので本試験を実施した。

2. 試験方法

- (1) 供試雛 単冠白色レグホーン種系統向交配初産雛雄ノ区40羽
- (2) 供試品 ダイナファック(トリメチルアンモニウム、ステアレート20%含有)
- (3) 試験期間 昭和37年3月28日より5月9日まで6週間
- (4) 試験区分並に供試飼料配合割合

品名	区別	試験1区	" 2区	" 3区	" 4区	" 5区
黄色とうもろこし		39	"	"	"	"
小 麦		12	"	"	"	"
ふ す ま		10	"	"	"	"
脱 脂 米 糠		10.07	10.045	10.02	10.02	10.02
大 豆 粕		14	"	"	"	"
魚 粕		10	"	"	"	"
アルファミール		2	"	"	"	"
食 塩		0.45	"	"	"	"
炭酸カルシウム		2	"	"	"	"
ま の 他		0.48	"	"	"	"
抗生物質添加剤		-	-	-	0.05	0.025
ダイナフアック		-	0.025	0.05	-	0.025
計		100	100	100	100	100

まの他内訳 ビタミンA,D剤 0.05、微量無機物 0.1、ビタミンB剤 0.05
 第2燐酸カルシウム 0.25、コウジウム予防剤 0.03

(5) 飼養管理

使用育雛器は下記のものを使用し飼料は上記配合飼料を不断給与とし
 し毎週末飼料の残量を秤量し各区の摂取量を測定し飼餌は無給与とした
 体重測定は毎週末個体別に測定しまの他一般管理は当場の慣例により実
 施した。

使用育雛器

期 間	育 雛 器
飼 付 ~ 14日	バッテリー育雛器 温源付
15日 ~ 28日	全 上 温源なし
29日 ~ 42日	中雛ケージ

3. 試験成績

A 発育成績

区分	週別	開始時	週別						増体重	増体重指数	標準偏差
			1週	2週	3週	4週	5週	6週			
試験1区	体重	34	58	102	158	226	316	418	384	100	52.2
	指数	100	171	300	465	665	929	1229			
" 2区	体重	34	57	100	162	236	332	452	418	109	68.3
	指数	100	168	294	476	694	976	1329			
" 3区	体重	34	58	104	171	247	337	438	404	105	61.2
	指数	100	171	306	503	726	991	1288			
" 4区	体重	34	57	104	170	244	339	440	406	106	69.8
	指数	100	168	306	500	718	997	1294			
" 5区	体重	34	59	108	174	245	352	469	435	113	52.0
	指数	100	174	318	512	721	1035	1399			

開始時並に毎週末個体別に秤量した体重について Smirnov の方法によつて棄却検定を行つた成績は上表のとおりで試験終了時の増体重平均値について統計処理の結果は次の通りである。

区分	試験1区	" 2区	" 3区	" 4区	" 5区
試験1区		5%有意	(-)	(-)	1%有意
" 2区	5%有意		(-)	(-)	(-)
" 3区	(-)	(-)		(-)	5%有意
" 4区	(-)	(-)	(-)		
" 5区	1%有意	(-)	5%有意	(-)	

B. 飼料の摂取量並に飼料要求率

区名	週別飼料要求率						飼料摂取量 (1羽当)	飼料要求率 (積算)
	1週	2週	3週	4週	5週	6週		
試験1区	1.644	2.119	2.682	2.840	3.465	3.939	1147.4	3.019
" 2区	1.888	2.160	2.444	2.610	3.647	3.505	1232.7	2.994
" 3区	1.682	1.982	2.288	2.609	3.354	3.786	1152.4	2.888
" 4区	2.080	1.978	2.412	2.788	3.338	3.952	1203.5	3.010
" 5区	1.805	1.963	2.510	2.864	3.160	3.575	1267.7	2.911

C. 健康状態並に育雛率

区分 区名	開始時	雛 死							終了時 羽数	育雛率
		1週	2週	3週	4週	5週	6週	計		
試験 1区	40	0	0	0	0	0	0	0	40	100
" 2区	40	1	0	0	2	1	0	4	36	90
" 3区	40	0	0	0	0	0	0	0	40	100
" 4区	40	1	0	1	0	0	0	2	38	95
" 5区	40	3	1	0	0	0	0	4	36	90

雛死は1週以内のものに主として卵黄未消化によるものであり、その後は圧死等の事故死であつて育雛率の差異は飼料による差異とは思われない。育成中の雛の活力、糞便、飼料の嗜好等は各区の間に差異を認めない。

4. 要 約

(1) 発育成績

- (a) 試験5区が最もよく試験1区並に試験3区との間にはそれぞれ1%、5%水準で有意差が認められた。
- (b) 次に試験2区がよい結果を示し試1区との間には5%水準で有意差が認められたが他の3、4、5区との間には有意差は認められなかった。
- (c) 試験3区4区は同程度で試験1区、2区との間には有意差は認められないが試験3区は試験5区との間に5%水準で有意差を認め試験4区は5区との間でわずかな数値により有意差は認められなかった。
- (d) 試験1区はどの区よりも増体量は低く3区4区との間には有意差は認められなかったが2区5区との間には夫々5%、1%水準で有意差を認めた。

(2) 飼料要求率

積算飼料要求率において試験3区が最もよく試験5区2区4区1区の間である。

(3) 雛の健康状態

育雛率には若干差異があるも1週以内の卵黄未消化と圧死等の事故死によるもので試験期間中雛の活力等の観察結果より各区に差異があるとは認めない。

以上の成績より第4級アムモニウム塩のダイナファック(トリメチルアンモニウムステアレート20%含有)を基礎飼料中に0.025%~0.05%添加することにより雛の成長並に飼料効率を促進することが認められ、抗生物質添加剤との併用(抗生物質添加剤0.025%ダイナファック0.025%

は单独使用より雞の成長促進に効果を認めた。

尚抗生物質添加劑ヒダイナフアックの罐の成長並に飼料要求率についての比較は本試験程度の添加率についての比較は本試験程度の添加率においては増体量において有意差が認められず飼料要求率はダイナフアックがわずかにすぐれておるがダイナフアックの添加量 0.025% と 0.05% 区において増体量は 0.025% 区がまさり飼料要求率は 0.05% がまさっておる結果を得ているので鳥試験の必要があると思う。

20. ハイグロミックス 8 の駆虫効果試験

殿内正芳 井崎金一
名倉清一 清水明良

目 的

抗生物質のハイグロミックス 8 の鶏の内容容生虫に対する駆虫効果を知るべく行った。

方 法

供試鶏は初産年度の白レグ3元交配鶏雌22羽雄2羽を一群とした平飼にして対照区、試験区 I、II、III の4区にし、給与飼料及び薬剤の飼料添加は次表の様である。投薬期間は3月6日より5月7日までの7週間にして投薬終了後ノ部屠殺検査し他は強力ヘルミノック錠をノ錠当給与し排虫数を調査した。飼料給与はノ日3回粉餌として給与し、午後の給餌に緑餌を混合した。

調査は投薬前の群単位とした虫卵数の検便投薬後毎週ノ回の検便と肉眼的虫体排泄状態を毎日調査し區別に集計した。飼料摂取量、産卵状態、飼料要求率等は區別に算出し、体重は開始時30日目、終了時に測定した。

飼料配合割合と添加率

	基礎配合	魚粕	トモロシ	小麦	生米糠	計	CP	TDN
配合率	55	10	15	15	5	100	17.2	68.2
	対照区	1区	2区	3区				
添加率	0	0.15%	0.075%	0.037%				

成 績